日小整会誌（J Jpn Ped Orthop Ass）17(2)：341-342, 2008.
第18回日本小児整形外科学会学術集会　パネルディスカッション3

大腿骨骨折の治療

座長：中　瀬　尚　長

小児大腿骨骨幹部骨折は，整形外科医として避けて通ることのできない外傷性疾患の一つである．牽引・ギプス治療が唯一のゴールドスタンダードとされたのはもはや昔の話であり，近年欧米ではこういった保存療法に加え，特に学童期の症例に対し，早期の離床，退院，復学を目指す目的で，様々な観血的治療が行われるようになりつつある．このような背景から，本邦での現状を明らかにし，各種治療法の特色や成績を明らかにする目的で本パネルが企画された．以下各演者の先生方の御講演の概要を示す．尚，発表のテーマは座長から各先生方に指定させて頂いた．

1）**牽引療法**：福岡市立こども病院の高村和幸先生は，幼児例に対する介達牽引と年少例における直達牽引治療の良好な成績を示され，高年齢児における治療期間の長期化を問題点として指摘された．

2）**牽引後ギプス療法**：星ヶ丘厚生年金病院の福島八枝子先生は，牽引後早期にギプスを装着し荷重させる方法による離床・入院期間の明らかな短縮効果を示された．合併症は認めなかったが，不安定型の骨折に適応する場合にはギプス内転位などの可能性にも注意を払うべきであるとされた．

3）**経皮的髄内ピンニング法**：高岡市民病院の前田明夫先生は，2〜13歳の幅広い年齢層に対し順行性の経皮ピンニング法を施行され，回旋変形治癒もみられず，長期経過にて過成長が問題となることも無く，成績良好であることを示された．

4）**創外固定法**：山梨大学の佐藤栄一先生は，5歳以降の幅広い年齢層に創外固定を適応され，手法上のコツと良好な術後成績をご呈示され，合併症としてピン刺入部感染が26骨折中10部位に認められたが，深部感染に至った例は無いと報告された．

5）**逆向性弾性髄内釘固定法**：香川県立中央病院の長野博志先生は，エンダー釘を用いた本方法を本邦にいち早く導入され，主として9歳以降の症例に適応され，その良好な成績を示された．合併症として刺入部位での疼痛を8肢中3肢に認めたと報告された．

6）**プレート固定法**：和歌山県立医科大学の宮崎展行先生は，MIPO法を4〜14歳の例に適応され，保存療法に比し，明らかな早期離床効果を有することを明らかにされ，抜釘など今後解決すべき問題点についても指摘された．

7）**髄内釘法**：聖マリアンナ医科大学の石井庄次先生は，特に高学年児童を中心に施行された髄内釘固定の成績をお示し頂き成功のコツや適応についてご教示頂いた．骨頭壊死例は無かったが，頸部延長と頸部外反変形を数例に認めたと報告された．

一括討論では，各演者の先生方に各種治療法の適応について，年齢，骨折型，合併損傷の有無といった観点から，長所・短所をまじえて端的にお示し頂き，さらに座長から症例を呈示して，治療方針決定に関する症例検討を行った．最後に学童期の典型的な症例を呈示してフロアの先生方の意見をお伺いしたところ，ほぼ全員が牽引療法とのお答えであり，未だ保存治療優位という本邦での現状が明らかとなった．